

Title	中川清著 『日本都市の生活変動』
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2001
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.94, No.3 (2001. 10) ,p.557(183)- 560(186)
JaLC DOI	10.14991/001.20011001-0183
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20011001-0183

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



中川清 著

『日本都市の生活変動』

勁草書房，2000年，457頁＋xxi

『日本都市の生活変動』大変に魅力的な書名である。評者は都市社会学を専攻しており、生活構造論のみならず生活文化や生活史研究にも関心を寄せている者であるが、著者の問題関心とかなりの程度一致している。著者の前著『日本の都市下層』（勁草書房，1985年）からも多くを学ばせていただいたが、しかし、対象としている「日本の都市社会の変化」は同じであっても、中川氏の「生活構造論」アプローチと社会学によるアプローチはかなり異なっていた。今回の『日本都市の生活変動』でも、もちろん骨格は「生活構造論」であるが、著者が「社会学的転回」をし始めている兆しを感じ取ることができた。生活構造論と社会学は、ともに「近代」が生み出したアプローチであり、近代（モダニティ）の性格を色濃く帯びている。その点を支点として、家計構造を中心とした近代的「生活構造」と社会生活における個人性と共同性の相互作用という社会学的アプローチを比較しながら、以下で本書の各論点を見ていくことにしたい。

本書全体の目次構成は以下のとおりである。

序章 日本の生活変動の経験——過剰対応と自己変容——

I 生活変動への視点

- 第1章 生活変動の巨視的構図
- 第2章 社会階層と生活変動
- 第3章 生活変動と社会政策像
- 第4章 生活変動と生活構造論
- 補論 I 生活構造論の軌跡

II 都市の生活変動

- 第5章 都市家族の形成と変容
- 第6章 近代における貧困の性格変化
- 第7章 世帯の形成と生活構造
- 第8章 日常生活における戦後性——1950年代の人工妊娠中絶——
- 補論 II 近代東京における二つの画期——人口の自然動態をめぐって——

III 生活認識の構図

- 第9章 <貧困>への関心がもたらしたもの——近代の社会調査と生活認識——
- 第10章 静かなる社会観察者——横山源之助
- 第11章 異質な風俗としての貧困——近代初頭の生活認識——
- 第12章 標準生活の模索と新中間層——安藤政吉論
- 補論 III 近代の自己認識を振り返る——1870年代から1970年代の社会調査——

著者は、序章において本書の試みを「より一般的に表現すれば、生活システムが近代という環境に対応して自らの生活構造を形作り、さらにはその構造自体を変容させる過程を明らかにする試みともいえよう」と述べている。著者が今回新たに提起している「生活変動」という概念は、中鉢正美の生活構造論では「環境変動」という、理念や程度の問題ではなく、「その変動に曝される生活体の側における諸性格との相対的關係によるのみ規定され」「このような諸性格の類型に変更を加えることなくしては生活体がそれに適應することができないような状態」こそが「環境変動」である、とされている。「環境変動」の概念から転用されている。そして、中鉢のミクロの生活構造論で提起された「過剰適應」、「構造抵抗」、「仮適應」、「再構造化」という類型を著者は、「過剰反応」「構造形成」「構造抵抗」「仮適應」「構造変動」「自己変容」という生活変動の性格として新たに定式化している。つまり「異質で強い環境としての近代」に対して「生活」がどう対応したのか、が問われているのである。

著者は時代や社会に回収するのではなく、「生活の営み」そのものから〈近代〉を見るという「生活変動」という概念を提起している。なるほど、中鉢の生活構造論から展開して、今現在の「生活」を語るとしたら、確かに著者の言うような「生活変動」論は成り立ち得るものと考えられる。中鉢の提起した「再構造化」を「構造変動」と「自己変容」という鍵概念で捉え直しているのも納得のいくものである。しかし、序章の「表序-1 日本の生活変動仮説」のように整理された概念図式が提起されると、逆に社会学で扱うところの「社会変動」論とどこが異なるのだろうか?と疑問が出てくるのである。「生活構造」は「社会構造」とははっきり異なる概念として、むしろ社会学においても定着している。しかし、「生活変動」なる概念が、ここまでマクロな「変動」概念を内包すると「社会変動」における「構造変動」や「自己組織性」などの諸概念と交錯する恐れが生じてくるものと考えられる。この点が、著者の「社会学的転回」を示している第一の点である。

著者の「社会学的転回」を示している第二の点として、第8章を挙げることができる。出生行動の戦後的変容を1950年代における「人工妊娠中絶」の増加に見て、「中絶経験はこのときすでに、自己変容ともいべき現代の生活変動の始まりを告げていたのである」(293頁)と述べられている。著者が今まで扱ってきたデータは、「家計調査」のデータが中心であったが、本書では階層や職業に関する調査、世帯調査・家族調査などの社会調査のデータが十分に使われており、さらに数量的データだけではなく記述中心のモノグラフにまで言及が広がっている。もちろん、第8章の「人工妊娠中絶」に関するデータにおいても、人口統計などの数量的なデータが中心であり、その意味では、歴史人口学、生活構造論の系譜を引き継いだものである。著者自身も「補注」において、「人工妊娠中絶そのものは本章の主題ではなく、中絶

という現象をとおして、生活変動の特徴を考えるのがここでの課題であった」(293頁)と述べられている。

しかし、著者が「少産と避妊」への移行期の1950年代における「人工妊娠中絶」の増加に着目したのは、まさに第8章のタイトルにあるとおり、「日常生活における戦後性」の表現としてこの現象を考察しているからである。著者は、ある意味では「社会変動よりも以前に生活変動が開始される」と述べているようにも思われる。社会学的アプローチは、日常生活に潜んでいる社会変動の要因に対して常に敏感でなければならない。戦後日本社会の「出生率の低下」だけを問題とするのであれば、「少産と避妊」そして高齢化へとつながる家族・人口問題として分析することもできる。しかし、著者は「マジョリティの経験としての中絶」を1950年代の〈社会〉や〈時代〉を背景として浮かび上がらせている。著者は明記していないが、ジェンダーや家族理念、〈子ども〉観などのいわゆる「近代家族」論と背中合わせになっている議論がここには隠されているように思われる。生活変動は、確かに趨勢的・数量的な客観的事実として把握されている。しかし、生活変動の背後には、生活意識や価値観の変化という優れて「社会的」な要因が存在しているのである。「人工妊娠中絶」という題材はそのことを暗示しているように思われるのである。

このようなネガとポジの関係の相補性は、「補論II近代東京における二つの画期——人口の自然動態をめぐって——」にも現れている。およそ「都市」や「都市化」を語る社会学的なデータは、「人口の自然動態」の数値ではなくて、「社会動態」すなわち「人口の都市への流入」を問題としてきたことは言うまでもない。ところが、著者が示す人口動態はあくまでも「出生数と死亡数」そして性比や世帯規模を加味する程度である。しかし、このような都市社会学的に見れば、いわば「ネガ」のデータからだけでも、1900年頃のそれ

までいわゆる「蟻地獄」であった都市が、「生きられる空間」へと大きく変容する第一の画期と「都市に定着して生活しはじめた、まさにその人々が、自らの再生産の規模を急速に限定することになる1955年頃に、近代都市の第二の画期」という二つの画期を明らかにしているわけである。そして、著者は「この二つの画期と都市生活との関係を考えてともに、二つの画期によって近代都市の範囲を前後から絞り込み、都市の近代性あるいは近代の都市性としてややもすれば議論の拡がりが必要な近代都市のイメージをできるだけ限定して、近代都市の研究に一つの視点を提示できればと思う」（298頁）と述べており、「われわれの抱いている近代都市のイメージは、自然動態という側面からすれば、たかだか50年続いたにすぎないことになる。近代の都市像自体の限定された性格が浮かび上がってくるのではないだろうか」（318頁）とも述べられている。これらの指摘は、都市社会学が通常用いている「都市への流入人口」「人口の社会増」とはネガとポジの関係ではあるが、結論的には非常に近い指摘がなされているのである。都市のモダニティは「近代資本主義」と軌を一にして展開してきた。（Savage, M. and Warde, A. *Urban Sociology: Capitalism and Modernity*, London: Macmillan, 1993 参照）その意味でも、近代都市の時代はそれほど長期間ではなく、すでに「曲がり角」に差ししかかっていると思われるのである。

第Ⅲ部の「生活認識の構図」においては、著者自身の視点そのものが「社会的」であると言えることができる。ここには、第10章と第12章のように、個人としての生活研究者の横山源之助と安藤政吉が論じられている章も含まれているが、第9章、第11章、補論Ⅲなど<貧困>への関心や生活認識、社会調査の自己認識など、社会的な認識論、方法論が随所に伺われる。例えば著者は「第11章 異質な風俗としての貧困」において、1897年の伝染病予防法、1899年の行旅病人及行旅死亡

人取扱法、北海道旧土人保護法および罹災救助基金法、1900年の精神病患者監護法と感化法などの立法に触れた後で、「これらの法整備が、いわば特異性や周辺性への対処をとおして外部を認識し、近代社会の実質的な輪郭を形作るものであったとすれば、1880年代にはじまる異質な風俗としての貧困認識の積み重ねとその変貌は、探訪者たちの主観的意図とはかかわりなく、近代社会の輪郭形成と密接な関係をもっていたのではないだろうか。ところで、20世紀、遅くとも1920年代以降になると、貧困認識の性格は、社会がその内部から必然的に生み出したという貧困観へ、それゆえ社会が貧困をその内部に同質化しなければならないという姿勢へと変容する。さらにいえば、このような近代の認識枠組みそのものが揺らぎはじめているのが今日の状況であろう」（400～401頁）と述べている。これらの指摘は、著者が「はしがき」で述べている「時代や社会からではなく、<生活変動>から近代を見る」という視点からすると、随分と社会的に転回した認識構図であるともいえる。

現代社会学は、認識の外部と内部をともに問題とする、両義的なアポリアを抱え込んでいる。すなわち、「社会的な認識の立場そのものが当該社会の外側には立ち得ない」という命題である。したがって、現代社会学の認識は「自己言及のパラドックス」「自己組織性」「自己反省性」「再帰性」などの諸概念と分かち難く結び付いているのである。著者は補論Ⅲで、川合隆男編『近代日本社会調査史』や江口英一編『日本社会調査の水脈』などを中心とした書評論文を書き、そのタイトルとして「近代の自己認識を振り返る」としている。このタイトルそのものが「生活認識の構図」の社会的転回を如実に示しているのではないだろうか。

今まで、著者の「生活構造論」を骨格とした本書の（隠された）「社会的転回」について注目してきたが、中筋直哉氏が『日本都市社会学会年

報19』(2001年)において本書を書評して、「近代的言説としての生活構造論の批判的再検討は、生活構造論が元来もっていたユニークさを見失わせるデメリットをもたらしてはいないだろうか」と疑問を投げかけている。その点については、必ずしも私はそうは思っていない。中筋氏も「生活構造論と都市社会学の対抗的相補性」という書き方で、本書に対して私とほとんど同じ「読み方」をしている。しかし、著者の「生活構造論」はやはり、大河内・江口系列の労働調査の系列とはもちろんのこと異なるが、籠山・中鉢系列の生活構造論ともその時代において一線を画していると思われる。あるいは言い方を変えると、「生活主体の

側から社会を展望する」あるいは「生命と社会とのあいだの領域」(いずれも中鉢の言葉)を目指した生活構造論が現代社会における到達点こそが著者・中川清氏の生活構造論であり、生活変動論であった、と思われる。「生活の根拠は、自分が生活していくことにおいてしか見いだせなくなりつつある」(はしがき)と著者が述べる時、「自分の生涯像」と「人間の再生産」を簡単に重ね合わせられなくなりつつある今日の社会状況が見えてくるのである。

有 末 賢
(法学部教授)